

2017. 第26号

富山大学 医学部同窓会報



2017. 第26号

富山大学 医学部同窓会報



C O N T E N T S

4. 新しく病院長に就任しました 富山大学附属病院長 齋藤 滋
5. リオ(デジャネイロ)オリンピック&パラリンピック感動をありがとう!
会長 田淵 英一 (医学科 昭和62年卒)
8. 〈グランドピアノ寄贈〉
富山大学附属病院にてグランドピアノ贈呈式が執り行われました
9. グランドピアノ寄贈 特集に寄せて
医学部同窓会 文化事業担当理事 廣田 弘毅 (医学科 昭和59年卒)
10. お祝いの言葉 ピアニスト 戸島 園恵
11. 拝啓、ホロヴィッツ様 杉谷の森合奏団 団長 富山大学 麻酔科学准教授
廣田 弘毅 (医学科 昭和59年卒)
13. 杉谷の森合奏団の音と曲づくり
杉谷の森合奏団 指揮・編曲 高須 良三 (薬学部 平成3年卒)
14. 仲間と音楽を奏でられる幸せ 厚生連高岡病院 富山大学附属病院 初期研修医
中川 尚美 (医学科 平成28年卒)
15. お祝いの言葉 富山大学医科薬科管弦楽団 団長 本田 茉実 (薬学部薬学科2年)
16. 富山大学附属病院フードコートのご紹介 運営会社 株式会社 柿里商店
17. 病院売店『ホスピタルローソン』 店長 山岸 哲也 (一般財団法人立仁会)
18. 〈新任教授就任挨拶〉
教授就任挨拶 神経内科講座 中辻 裕司
19. 臨床研修部からのメッセージ
臨床研修部長 卒後臨床研修センター長 山本 善裕
20. 〈退官寄稿〉
“ぼんくら” 教授から感謝とそしてBon Courage!
大学院医学薬学研究部 (医学) 放射線基礎医学講座 近藤 隆
22. 富山での25年を振り返って 免疫学講座 村口 篤
23. 退任にあたって 老年看護学講座 竹内 登美子
-

-
24. 地域医療を温かくしっかり支える南砺市民病院
南砺市民病院 院長 清水 幸裕 (医学科 昭和57年卒)
26. 山岳部創部40周年祝賀会 富山大学杉谷キャンパス山岳部OB会 幹事長
加藤 秀一 (医学科 平成19年卒)
28. 昭和62年医学科卒業生による同級会を開催しました
富山国際学園 富山短期大学 専攻科食物栄養専攻科長
田淵 英一 (医学科 昭和62年卒)
30. 第40回医学薬学祭を終えて 学祭実行委員 石川 真央 (医学科3年)
32. 第35回富山大学医学部同窓会総会 加藤千代先生をお招きして
33. 新同窓会室が完成しました
34. 同窓会のホームページをリニューアルしました！
- 〈卒業生だより〉
35. 卒業生インタビュー企画 (大江 真琴先生)
38. 卒業生だより制作委員による2015年度5年生臨床実習アンケート
- 〈計報〉
40. 追悼 帯広厚生病院 第一内科 高村 圭 (医学科 平成6年卒)
41. 金子健次君を偲んで 横浜南共済病院 小児科 西澤 崇 (医学科 平成6年卒)
43. 金子健次君への追悼文 おび内科・漢方クリニック 小尾 龍石 (医学科 平成6年卒)
44. 金子健次君へ 新潟県厚生連糸魚川総合病院 外科 田澤 賢一 (医学科 平成5年卒)
45. 第9回富山大学ホームカミングデープログラム
46. 平成28年度富山大学附属病院関連病院長懇談会理事会議事要旨
48. 平成28年度富山大学附属病院関連病院長懇談会議事要旨
49. 平成28年度第35回富山大学医学部同窓会総会 議事録
54. 職掌分担・評議員一覧
56. 平成27年度会計報告
58. 第68回 西日本医科学生総合体育大会
59. 平成27年行事報告・平成28年行事・平成29年行事予定
60. 医学部人事消息
62. 編集後記
63. 会計からのお知らせ
64. 評議員からのメッセージ
- 同窓会名簿の発刊に向けて
-



新しく病院長に就任しました

富山大学附属病院長 齋藤 滋

2016年度より新しく富山大学附属病院長に就任しました齋藤 滋です。皆様、今後とも宜しく願います。

まずは簡単に自己紹介をさせていただきます。昭和55年に奈良県立医科大学を卒業後、産婦人科医となり、平成10年に富山医科薬科大学産科婦人科の2代目教授として赴任致しました。生まれも育ちも大阪でしたので、富山へ来た当初は冬の雪が恐怖でしたが、次第に慣れてきました。また春の桜が、ことのほか美しく感じられ、富山に来てからは四季の移り変わりを楽しむようになりました。富山に来てからは小児科前教授であった宮脇先生に海釣りの手解きを受け、今では海釣りが唯一の趣味となっています。釣るのも楽しいですが、後で料理して釣れたばかりのキトキトの魚を賞味するのは最高に贅沢ですね。

皆様方、同窓会の先生方は日本全国で地域医療に御活躍のことと存じます。本学も今年で開学40年を迎えました。さすがに40年経ちますと、病棟も改修が必要となり、新病棟建築、旧病棟改修に引き続き、現在は外来棟の整備を行なっています。立体駐車場も出来、冬場や雨の際でも、濡れずに外来まで来られるようになり、車椅子を使用している方にも好評です。卒業生の皆様で、しばらく母校を訪れていない方は、ぜひとも一度帰学して、その変わり様を実感して下さい。

現在、地方では医師確保が極めて困難な状況にありますが、富山大学では教育に力を入れて卒業生の県内定着に努めています。来年度の富山大学への初期研修医は32名、また卒業生の県内定着が50名と増加し、富山県内の多くの病院ならびに富山大学が熱心に初期研修医を教育している成果が表れてきています。今後は専門医も富山県に残ってもらえるように、努めていきたいと思っています。富山大学で卒後研修をして良かったと実感してもらえよう、病院スタッフ全員で頑張りたと思っています。また診療レベルも目標を高く設定して、富山県民のみならず、全国から患者さんが富山大学を受診してもらえようになりたいと思っています。今後とも温かい御支援をお願いします。



リオ(デジャネイロ) オリンピック&パラリンピック 感動をありがとう！

富山国際学園 富山短期大学 専攻科食物栄養専攻科長
会長 田 淵 英一 (医学科 昭和62年卒)

今年話題は何と言っても、リオ(デジャネイロ)オリンピック&パラリンピックでしょう。オリンピックで始まり、オリンピックで終わったと言ってもよいぐらい日本にとってビッグイヤーとなりました。とにかく、オリンピックでの日本人選手の活躍がすごかった。開催期間中連日、日本人選手がメダルに絡む活躍をする競技種目があり、私も毎夜2時・3時に熱狂、興奮しっぱなし、そのお陰で仕事の辛い何の…でも、感動できるイベントが待っていると思うと毎日頑張れてエキサイトしっぱなしでした。

とくに、日本歴史上初で、少なくとも私が生きている間にはもうないと思われる人類史に残る記録も生まれました。何と言っても圧巻だったのは、男子400mリレー決勝。この種目の過去の歴史を振り返ると、戦前・戦後は長く欧米の白人選手が活躍し、近年になってはアメリカ黒人選手が独占し、その後、ボルト選手を代表にアフリカ黒人選手が活躍し、アジア選手はこの競技には向いていないと言われつつづけていました。ところが、前回のロンドンオリンピック競技では、日本人選手が決勝に顔を出すようになり、遂にリオオリンピックで銀メダルを獲得しました。アジア勢で決勝に残ったのは日本と中国だけ、しかも、それ以外の国は、先進国でありながら筋骨隆々の黒人選手のみ。その上、9秒台の個人記録を持つ選手が集う中、日本選手チームの山県亮太選手、飯塚翔太選手、桐生祥秀選手、ケンブリッジ飛鳥選手の4人は誰一人9秒台の記録を持っていない。このような状況で、日本チームが実力でメダルが取れると想像した人は、世界中ほとんどいなかったと思います。

決勝レースでは、歴代最多優勝回数を誇るあのアメリカチームを実力で抜いた。これが、とにかく圧巻だった。記録も37.60秒、もちろん日本新記録。この記録は、リレーの中

で第1走者以外の3名が9秒台前半を出さないといふ数値。個人記録で9秒台が一人もいないというのは信じられない神がかり的な数値と言えるでしょう。ゴールでは、あのジャマイカのボルト選手と並んで2位を勝ち取ったケンブリッジ飛鳥選手、もうカッコよかった！ただ、よく見ると、日本人というよりは、やっぱり黒人っぽかった…けど、すごく感動した!!!

さて、パラリンピックでも、日本人選手の活躍が目覚ましく、ボッチャでは団体に銀メダルを獲得するなど多くのメダルを獲得した。私が目を光らせたのは、常人ではできないレベルでの障害者たちの活躍ぶりでした。例えばボッチャでは、驚異的な集中力で、理想的な位置にボールを運ぶ能力を見せつけられた。そして、男子100m走では、切断・機能T47の分野で遂に10.57秒というとんでもない記録が飛び出した。この記録をたたき出したのは、ブラジルのペトゥルシオ・フェレイラ・ドス・サントス選手だ。個人の能力も然りだが、義足技術の進化が目覚ましく、関係者によると、障害者が世界新記録を樹立するのにも時間の問題だということだ。時代が変わると、こんなことも起こるのかと、人間の飽くなき知的・技術的進歩には本当に驚かされる。長生きはするものだとつくづく思う。

ところで、リオオリンピック・パラリンピックで活躍した選手の中心年代は、20歳代である。これは、どの時代でもそんなに変化はない。ただ一言つけ加えるならば、現在の50-40歳代の親が産んだ子供たちである。つまり、1960年～1980年頃に生まれた私たちの世代である。この世代の人たちは、戦後の経済成長時代に生まれ、それまでの国家主義といった全体主義が薄れ、欧米化、個人主義、社会主義など“価値観の多様化”が起ころはじめた、いわゆる激動の時代の世代である。ちなみに現代では、師弟制度や医局制度の廃止のように、個人主義的価値観が主流となっている。

どの時代でも、人々は時代の流れに押し流されながら生きている。ここで、現代の日本の若者に目を向けて見るとどうだろうか。筆者から見ると、多様な価値観かつ個人主義の中で生きにくそうに見えるが、そんな中でも、上述の選手たちのように結構たくましく生きている。“ゆとり世代”だの何なのと揶揄されることもあるが、捨てたものではない。近くの若者に目を向けてみても、母校の学生たちも結構頑張っている。同窓会の活動にも積極的に参加してくれている。いつの時代でも、若者の頑張りが社会を引っ張っている。これからも、若い人たちの活躍に期待したい。